

京都大学	博士 (教育学)	氏名	小野 文生
論文題目	〈非在〉のエティカ —ホモ・パティエンスの人間学のために		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本研究は、〈非在〉のエティカの探究を通じて、「ホモ・パティエンス(homo patiens) = 受苦するひと」という人間理解に立った人間学を構想する。</p> <p>〈非在〉とは、「在る／無い」の単純な二項対立図式に収まらない「残りのもの」を思考するための概念である。現れることのないまま、しかし〈「在るのではない」わけではない〉という仕方で、つねにすでにそこに存在しているものを指す。〈非在〉は、排除され、居場所を奪われがちな受苦的存在を名指すために要請されると同時に、それらが「承認のポリティクス」に還元されることを拒む。〈非在〉のエティカの探究は、「エートス」という語源に遡ると共に、コナトゥス (自己保存への努力) の再審と現代の生政治に対する批判的省察を伴う、エティカの根源的な問いなおしとなる。</p> <p>具体的には、人間の本源的な「弱さ」「もろさ」「ままならなさ」を主題化し、そのパトス (受苦) 的契機の教育学・人間形成論的な意義を論じる。そのために、H・アーレント、E・レヴィナス、G・アガンベン、石牟礼道子、鶴見俊輔らの思想の検討や、教育哲学、臨床教育学における「パトス論的転回」の動向を検討し、それらの思想的可能性を〈かなしみの知〉と〈知のかなしみ〉の両義性をめぐる問題構制のうちに見出す。</p> <p>以下、本研究の本論は3つの部門によって構成される。</p> <p>第I部「〈非在〉の思想的水脈——人間的なるものの在り処」では、主としてアーレント、レヴィナス、アガンベンの哲学をとりあげ、西欧近代、啓蒙、ショアー／ホロコースト、生政治をフィールドとする。</p> <p>第1章は、アーレント思想の中心的主題をコモン・センス論のうちに見出し、啓蒙理性とは異なるもう一つの理性の探究として読み解く。『全体主義の起源』の人権のもろさ、『人間の条件』 (= 『活動的生』) における赦しと約束、『政治の約束』における哲学の起源をめぐる議論などを紐解きながら、「パトスとともに生きる人間」の「条件」の形象をあきらかにする。</p> <p>第2章では、アガンベンの「剥き出しの生」をめぐる生政治への批判を導きの糸としつつ、〈非在〉概念に基礎的イメージを与える。インファンティア、非の潜勢力、なんであれかまわないもの等の概念の検討を通じて、〈非在〉を「ある／ない」の単純な二項対立図式には収まらない「残りのもの」を思考するための概念として提起</p>			

する。その作業は、遺棄されてきたものたちと共に新たな共同性を編みなおすためのエティカの構想に接続される。

第3章では、古代ギリシア以来の伝統的な「パテイ・マトス（受苦をとおして学ぶこと）」という思想に光を当てる。アガンベンの潜勢力（可能性／能力）をめぐるアリストテレス思想の特異な読解をもとに、「～ないことができる」という〈非の潜勢力〉のうちに——技術的合理性と機能主義のもとで経験のパトスの契機をむしばむ——ホシヨウ科学時代に対する批判的準拠を見いだす。

第4章では、レヴィナスとアガンベンのスピノザ「コナトゥス」概念の読解をとりあげ、「ただ生きること」という生存の力が倫理（エティカ）とむすびつく可能性を探究する。アガンベンの特異なレヴィナス読解を跡づけながら、コナトゥスを、単なる自己保存の力の発露というよりは、むしろ「もろさ」や「ままならなさ」といったパトスの契機にみちた本源的に不安定な力として、それゆえ〈非在〉を迎え入れる倫理的な力として再定義することをこころみる。

つづく第Ⅱ部「エティカの源泉——弱さとかなしみ」では、日本の民衆思想に着目し、石牟礼道子と鶴見俊輔をとりあげる。日本近代、水俣病、戦争、棄民政策、市民の政治がフィールドとなる。

第5章は、カタストロフィの記憶に関する哲学を参照しつつ、石牟礼道子を中心とした水俣病をめぐる多様な言説や〈受難と再生〉の物語をとりあげる。「承認のポリティクス」には回収されない〈非在〉のエティカの生起する場所を切りひらき、「悶え加勢」、「赦し」、「当事者性」、「もうひとつのこの世」など、ホモ・パティエンス思想にかかわる問題群の可能性を示唆する。

第6章では、不知火海の風土に息づく煩惱をめぐる日常表現を手がかりに、「煩惱のケア」という思想の可能性について論じる。他者のかなしみへ「近づくことの不可能性」と対象から「遠ざかることの不可能性」との逆説的共存という事態から、ひとのかなしみに応答するパトスの知の在りようを探る。

第7章は、戦後日本の市民社会論の源泉の一つとなった鶴見俊輔の思想と行動を、日常性と自己の「ひずみ」から出発する「弱さの倫理」の探究として描き出す。「弱さ」を克服して「強さ」に反転させるのではなく、「ひずみ」（偏向・限界・欠点）を活かすような、パトスにみちた不断の遊動性の実現が必要であると示唆される。

第8章は、鶴見俊輔の大衆文化論のなかでもとりわけ重要な漫画論を対象に、彼の「方法としてのアナキズム」の内実をあきらかにする。フランクフルト学派や竹内好の「掙扎（そうさつ）」との関連性を紐解きながら、日常のエートスにもとづいた〈身もだえの知〉の構想に、その可能性の中心を見いだす。

第9章は、石牟礼と鶴見の交流を描く。『思想の科学』をきっかけに鶴見は石牟礼を、日本近代の背負った「罪」を比類なき深さにおいて問う存在として認識する。

ふたりの思想の交錯地点に浮かびあがる主題が、〈非在〉をまなざす〈かなしみの知〉と〈知のかなしみ〉として規定される。

第Ⅲ部「パトスの沃野へ——もろい部分にたつ思想の探究」では、ホモ・パティエンスの人間学の具体的展開のフィールドとして、教育学・人間形成論、とりわけ教育哲学・臨床教育学の領域における理論や言説をとりあげる。

第10章は、「教育学のパトス論的転回」の「論理的文脈」をあきらかにするために、現行の理論・実践の底流にある啓蒙理性にもとづく思想に変更を迫る。既存の「批判」の論理的タイプを「根源／生命論的」、「超克／弁証法的」、「攪乱／差延的」に分類したうえで、本研究のころみみを「非在／絶対的」として差異化する。

第11章は、「もろい部分にたつ」思想的原理から教育哲学を構想する。その原理は、教育と技術のかかわりをパトスの視点から批判的に再考し、システム化と脱システム化の解消しえない二重性を維持する。「弱さ」や「もろさ」を含んだパトスの知によって教育・人間形成をめぐる知を再定義するための方向性を示唆する。

第12章は、パトスの知が臨床教育学の思想的基底において果たす役割を、水俣病の受苦的経験から生み出された思索を手がかりに考察する。両者をつなぐ思考の導きの糸は、「ひとりで在ること」と「共苦すること」という主題である。「同行同苦」や「寄る辺なさ」の概念を手がかりに、つながりなしにつながること、当事者性の動揺といった主題を考察し、論理矛盾や逆説にみちた経験そのものを考え抜こうとするパトスの知と臨床教育学の展開可能性を展望する。

以上、第Ⅰ部から第Ⅲ部までの考察を踏まえて、終章「〈非在〉のエティカ——ホモ・パティエンスの人間学のために」において、あらためて、弱さの思想とは何かを論じ、共苦するパトスのひらく関係性について整理し、〈非在〉の多元的な位相を示唆したうえで、それらがコナトゥスと遊動性のエティカという観点においてむすびつくことを示す。最後に、ホモ・パティエンスの人間学の「対象」と「方法」と「エートス（ものの見方）」を論じ、受苦する人間の「祈りの文法」を含む思想的構想のむすびとする。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、「ホモ・パティエンス＝受苦するひと」の人間学を構想したスケールの大きな思想研究である。

根底をなす「〈非在〉」とは、例えば、「排除され・居場所を奪われた・受苦的存在」を指す。存在しているにもかかわらず「無い(いない)」ことにされてしまう存在である。しかしその「非在」を存在に連れ出すのではない。「非在」を「非在」の在り方のまま、思想の中に組み入れようとする。その「非在」が人間存在の「もろさ」「弱さ」「ままたらなさ」をそのまま受け入れる基盤となる。

こうした「非在」を、言葉として(とりわけ研究論文の中で理論的に)語る営みは、しばしば「非在」を「存在」に連れ出し、「非在」を破壊してしまう。本論文は、その困難と格闘した思想家に注目し、その思想を丁寧に検討することを通して、自らその難問と格闘する。現れることのないまま、しかし常に既にそこに存在している「非在」を、「非在」のまま扱う語り、本論文の最大の特徴をなす。

本論文の内容は、極めて多岐にわたるが、大きく三つの部門に分かれる。

第一は、「非在」の思想的水脈を、主としてアーレント、レヴィナス、アガンベンの哲学に求め、詳細に検討する仕事。西欧近代の啓蒙、アウシュヴィッツ、科学技術の暴走、現代の包摂的排除の生政治などが、詳細に検討される。

第二は、日本の民衆思想、とりわけ、石牟礼道子と鶴見俊輔の検討。水俣病を中心としたカタストロフィにおける受苦的経験、技術的合理性やシステムが純化してゆく隘路、生きることのかなしみ・寄る辺なさ・身もだえの知などが詳細に検討される。

第三は、教育哲学・臨床教育学の検討。中心的な課題は、技術的合理性や機能主義(有用性・即効性・エヴィデンス偏重)への対抗原理としてパトスの知の可能性、あるいは、ホモ・パティエンスの人間学であり、「臨床の知(哲学/教育学/フィールド学)」を再検討している。

本論文の優れた点は、以下のとおりである。

一、極めて多角的な視点を持ちながら、その全体を、ひとつの主題の下に有機的に構造化している。三部構成のそれぞれの「部門」について「見取り図」が付き、それらが統一的に整理され、論文の「全体構図」が提示される。しかもそうした図表は、むしろ「図表に現れない・その背後」を指し示すために作成される。「非在」という在り方をする「背後」を、「非在」のまま浮き彫りにするために、理論的枠組を作成し、あるいは、体系性を前提とすると扱うことのできない位相を浮き彫りにするために厳密な体系性を提示し、その「背後」に「非在」の位相を浮かびあがらせている。

二、厳密な学問的手続きを踏まえている。重要な言葉に立ち止まり、例えば、語源に遡り、あるいは、プラトンのギリシア語を訳し直すことを通して、個々の概念の意味の広がりや丁寧を確認し、その作業を通して、多領域の思想をつなぎ合わせることに成功している。そして「語り方（ナラティヴ）」がその「思想内容」と一致している。「共に苦しむ」という思想内容を、自ら「共に苦しむ者」として語るという課題を、パフォーマンスに実践している。

三、臨床教育学の思想的背景を明確に規定している。「もろさ」「弱さ」「ままたらなさ」の視点から、現代思想を基盤とするのみならず、日本の民衆思想と響き合う地平の中に、日本の教育研究（臨床教育学）を位置づけた。その試みをこれまで誰もなしえなかった水準において遂行した点において高く評価される。

口頭試問においては極めて濃密な質疑が行われた。例えば、1)「非在」の思想的水脈として、石牟礼道子から鶴見俊輔へとつなぐ構成は適切であったか。市民権を得ることのない人々（「死民」）への関わりを安易に「市民運動」と呼んでよいか。2)論文として成功したことによって、逆に、取り逃がしてしまうことがあったのではないか。理論のうちに納まらないノイズをそのまま曝け出す工夫が必要ではないか。しかしこうした問題は、本人も十分に自覚し、今後の課題としていることから、本論文の価値を貶めることにはならないことが確認された。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和3年4月1日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降